

夫婦における性別役割分業意識の不一致の規定要因

—現代核家族調査, 2008 を用いた分析—

重田 怜央 (金井ゼミ)

論文の目次

第 1 章 研究の背景と目的

- 1.1 問題の所在：夫婦における家事分担についての研究
- 1.2 研究の目的：夫婦における性別役割分業意識の異同

第 2 章 先行研究

- 2.1 現代日本社会における性別役割分業の実情
- 2.2 性別役割分業意識とは
- 2.3 家事分担に対する認識のずれ

第 3 章 リサーチ・クエスションと仮説

- 3.1 リサーチ・クエスション
- 3.2 仮説
- 3.3 使用データ
- 3.4 分析方法
- 3.5 変数と記述統計

3.5.1 従属変数

3.5.2 独立変数

3.5.3 統制変数

第 4 章 分析結果

第 5 章 結論

- 5.1 分析結果のまとめ
- 5.2 考察
- 5.3 結論
- 5.4 今後の課題

文献

謝辞

付録：R スクリプト

論文の要旨

1 はじめに

先行研究において、夫婦の家事分担の規定要因や夫の家事遂行と妻の夫婦関係満足度との関連と、夫婦における性別役割分業意識との間には直接的な関連性があるということが明らかとなっている。しかし、それにもかかわらず、夫婦における性別役割分業意識が異なる際の規定要因や規範についての研究はそこまで多くはみられない。

そこで本稿では、夫婦における性別役割分業意識に焦点を当てることの重要性という観点のもと、夫婦において、性別役割分業に対する考え方が一致せず、差が生じているとき、そこにはどのような規定要因があるのかを明らかにする。

2 先行研究

夫婦における性別役割分業意識の規定要因にはどのようなものがあるのか。

例えば、島直子は、年齢が高い夫ほど性別役割分業に肯定的な考えを示し、妻の家計貢献度が高い夫ほど性別役割分業に否定的な考えとなる傾向があること、夫の社会経済的地位の違いによって、妻の就労が夫の性別役割分業意識にもたらす影響は異なってくるということを指摘している（島 2011）。また、家事への参加が高い夫ほど、性別役割分業に否定的な考えを持ちやすいということが明らかとなっている（嶋崎 2006）。

3 仮説

本稿では、夫婦の性別役割分業意識を①3 歳児神話（内田 2010）②夫に稼得役割があるとする考え方、③妻は家事・育児に専念するべきという考え方という 3 つの側面に分けて、それぞれにおいて仮説を立てた。具体的には、仮説 1「夫婦の間で、学歴や就業形態、労働時間、収入、家事頻度が異なると、そうではない夫婦と比較して、3 歳児神話に対する考え方が一致しにくいだろう」。仮説 2「夫婦の間で、学歴や就業形態、労働時間、収入、家事頻度が異なると、そうではない夫婦と比較して、夫の稼得役割に対する考え方が一致しにくいだろう」。仮説 3「夫婦の間で、学歴や就業形態、労働時間、収入、家事頻度が異なると、そうではない夫婦と比較して、妻の家事・育児役割に対する考え方が一致しにくいだろう」の 3 つである。

4 データと分析方法

使用データは、「現代核家族調査、2008」の中にある「妻用調査票」と「夫用調査票」である。

従属変数は、「子どもが小さいうちは母親は育児に専念すべき」「夫は家族のために収入を得る責任をもつべき」「妻は家族のために家事や育児をする責任をもつべき」という設問項目それぞれの夫と妻の組み合わせの変数を用いる。独立変数は、夫と妻それぞれの、「学歴」「就業形態」「週あたりの労働時間」「昨年 1 年間の収入（単位は 100 万円）」「家事頻度（料理）」「家事頻度（食事の片づけ）」「家事頻度（掃除）」「家事頻度（洗濯）」と、それぞれにおいての夫と妻を組み合わせた変数を用いる。統制変数は、夫と妻それぞれの「年齢」とその組み合わせ変数と「結婚年数」を用いる。

分析方法は、多項ロジスティック回帰分析を用いる。

5 分析結果

多項ロジスティック回帰分析によって、夫の学歴、妻の収入、労働時間、就業形態において有意な関連がみられるという結果が得られた。

特に、妻の収入に関しては、全ての仮説において有意な正の関連がみられるという結果であった。

また、性別役割分業意識を 3 つの側面に分けて分析することにより、この側面では有意に働いていた変数が違う側面では有意にはならなくなったなど、それぞれにおいて有意に働く変数が変わるということが分かった。

6 結論

本稿の分析結果から、まず、夫の学歴や妻の収入、労働時間、就業形態の違いが、夫婦における性別役割分業意識の異同の規定要因となっていることが明らかになった。特に、妻の収入が 3 つの仮説全てにおいて有意な正の関連がみられるという結果であり、これについてはより詳細な検討・分析が求められよう。

また、本分析によって、夫婦間の性別役割分業意識の複雑性・多次元性が明らかとなった。これは、これまでの先行研究で指摘されている内容と合致するものである。このことから、性別役割分業意識を研究するときには、従来のような、1 つの質問項目のみで明らかにするのではなく、複数の質問項目ではかりそれぞれを分析することの重要性が、本研究によって再度理解できる。

主要参考文献

島直子, 2011, 「妻の家計貢献が夫の性別役割分業意識に及ぼす影響——夫の社会経済的地位による交互作用」『家族社会学研究』23(1): 53-64.

嶋崎尚子, 2006, 「男性の性別役割分業意識——家族関係・家族経験による形成過程」『夫婦、世帯、ライフコース：第 2 回家族についての全国調査(NFRJ03)2-1』(第 2 次報告書 No. 1), 125-37.

内田伸子, 2010, 「『3 歳児神話』は『真話』か? ——働く親の仕組みを見直し、社会の育児機能を取り戻す」15(2): 276-86.